

# エウージェーニオ・ザノーニ・ヴォルピチェルリ

—東洋に於けるダンテの紹介者—

山 口 清

十九世紀の末期から二十世紀の初期にわたって、およそ半世紀の間を中国で過したエウージェーニオ・ザノーニ・ヴォルピチェルリ Eugenio Zanoni Volpicelli は、元神戸駐在イタリア総領事、京都大学講師であったアルフォンソ・ガスコと共に、東洋とイタリアとの間に於ける文化の交流に多大の貢献をしたイタリア生まれのオリエンタリストの双壁と呼ぶことができる。

ヴォルピチェルリは一八五六年にナポリで生まれ、一九三六年に八十年の生涯を長崎で閉じた。その墓は長崎の外人墓地にある。墓碑には彼がキリスト信者であったことを示す十字の印の下にコンメンダトーレ・ザノーニ・ヴォルピチェルリの名と誕生の年と死亡の年が刻んである。この墓石は一九四五年の八月、長崎に投下された原爆の爆風によって吹き飛ばされ、およそ十五年の間そのままの状態で放置されていたが、今から五年前、ニューヨークに住居する李

叔明という中国人からヴォルピチェルリの墓についての問い合わせと墓の修理費を出すから修理をして欲しいという申し出があった時に、長崎市当局の手によって、またその出費に於いて修復された。李叔明という人はヴォルピチェルリの中国時代の親友である。

ヴォルピチェルリはナポリで学業を始め、一八七五年に工業専門学校に於いて物理学と数学の修業証書を受けた。一八七八年から三年間、ナポリの中国学院に於いて中国語を学ぶための奨学金を受けた。これが彼を中国と結びつけ、またわが日本とも結びつける機縁となった。中国学院が王立アジア学院に昇格した時には、彼はアラビア語を知るためにシリアへ行った。この王立アジア学院は現在ナポリ大学の東洋学院となっている。

ヴォルピチェルリは一八八一年に中国へ渡り、十七年間中国の財政関係の仕事に従事した。一八八四年にイタリアと朝鮮の間に条約

が締結された時には通訳として働いた。一八八五年に中国軍隊のト  
ンキン撤退の問題が起こった時には、中国（当時は清国）の皇帝に  
よって任命された中国委員会の一員となった。この時彼は、遠い  
昔、元のクブライ・カンによって重く用いられたマルコ・ポーロの  
ように、第一級の中国官吏となった訳である。

その翌年一八八六年にはウラジミールというロシア風のペンネー  
ムを用いて、中国とロシアの戦争に関する論文を英語で書き、それ  
をロンドンで発表したその論文は今日も尚その価値を認められてい  
るということである。

それから十一年を経て一八九七年、彼はシベリアとロシアを横断  
し、風俗習慣を研究した。これは同じくウラジミールのペンネーム  
によって「太平洋岸のロシア」と題する論文を、これもまた英語で  
書くためであった。

一八九九年にはイタリア外務省の官邸につき、香港と広東の総領  
事に任命された。その翌年、即ち一九〇〇年に義和団の乱が起こっ  
た時には、李鴻章と重要会議を運び、そのために北京駐在のイタリ  
ア公使サルヴァーゴ・ラツシ侯爵によって功績を高く評価された。  
一九〇四年日露戦争の際には、中国の岸へ敗走したロシアの軍艦  
ワリアグ号の乗組員たちに救助の手をのべた。そして一九一一年に  
は再びシベリアとロシアを横断した。

エウジエーニオ・ザノーニ・ヴォルピチェルリ

この年、清国に革命が起こり、一九一二年に中華民国が発足した  
が、ヴォルピチェルリは政情尚不定な一九一二年から一九一九年ま  
での間、後には生命の危険まで冒しながら中国の事変を見守り、内  
乱を避けるように常に努力した。そのために孫逸仙や広東軍政府か  
ら感謝された。この間に於いて一九一五年から一九一九年まで香港  
大学で医学を修め、産科学と婦人科学を卒業した。彼が六十才の年  
令に達して医学を志した動機が何であったかは今のところ明らかで  
ない。

ヴォルピチェルリの著作はウラジミールのペンネームによって発  
表されたもののほかに次のようなものがある。英語で書いた「中国  
に於ける初期ポルトガル人の商業と居留地」(Early Portuguese  
Commerce and Settlements in China, Journal of the China  
Branch of the Royal Asiatic Society, Vol. XXVII, 1892—  
1893)。同じく英語で書いた「中国に於ける銀の問題と物価の変  
動」(The Silver Question in China and the Fluctuations of  
Prices, Shanghai)。これは一八九六年 China Branch of the  
Royal Asiatic Society によって集められた資料によってなされた  
研究である。「中国語の音韻学」(Chinese Phonology, an at-  
tempt to discover the sounds of the ancient language and to  
recover the lost rhymes of China, Shanghai, 1895)。「中国

エウジエーニオ・ザノーニ・ヴォルピチェルリ

語の古い発音」(Prononciation Ancienne du Chinois)。これはヴォルピチェルリがChina Branch of the Royal Asiatic Societyの代表として、パリで開催されたオリエンタリスト国際会議に於いて発表したものである。このオリエンタリスト国際会議の開かれた年は「中国語の古い発音」の抜刷には明記されていないが、それが「中国語の音韻学」が発表された年より後であることは明らかである。それから「イタリアに於ける或る中国人の印象」(Le impressioni di un cinese in Italia, brano del giornale di Hsie-Fu-Ceng, 10 marzo - 3 aprile, 1891. Traduzione di Z. Volpicelli, Napoli, 1902)がある。これは英、仏、ベルギー、イタリアへ清国の公使として派遣されたシエ・フウ・チェンという外交官がヨーロッパで見聞したことを書いた日記のうち、イタリアに関する部分をイタリア語に訳したものである。訳書は時のイタリア王国外務大臣ジュリオ・プリネットイに捧げられている。これは中国の一流知識人の眼にイタリアがどのように映じたかを示す貴重な資料となる。このほか、死刑反対論をとなえたベッカーリアの世界的名著「犯罪と刑罰」を中国語に訳した。

ヴォルピチェルリが香港大学の医学コースを終えた一九一九年は彼の生涯に新たな展開をもたらした年である。彼は仏教の来世観に深い興味を持ち、その研究を始めた。彼がダンテの「神曲」を中国

語に訳したのも、この仏教的来世観の研究と関係があるように思われる。南船北馬という言葉があるように中国の南部での交通は船を利用することが多い。ヴォルピチェルリは川や運河を航行しながら南部の仏教寺院を見てまわった。彼はそのために彼自身の一人乗りの小さなボートを持っていた。彼はそれに「プロチーダ」という名前を与えていた。川の流れが強くて「プロチーダ」を用いることが危険な場合には、それを適当な地点まで汽車や船で運んだのちに、川に浮かべるようにした。そのような旅の途中で、彼は中国の奥地で布教に従事しているイタリア人の神父にしばしば出会った。一九一九年の夏、彼はレイヤンという町でフランチェスコ会士のバイモ神父に出会った。バイモ神父はそのあたりの川の事情に通じていたので、ヴォルピチェルリは彼に伴なわれてシャンという川を通じてヘンチョウという町に達し、そこでもう一人のフランチェスコ会士モンダイーニ司教に会った。ヘンチョウの近くに多くの仏教寺院があった。そこにあった寺院のうちで、雁の頂の寺(II Tempio della Vetta dell'Oca Selvatica)、蓮の花の寺(II Tempio del Fiore di Loto)と二つの寺院に於いて、ヴォルピチェルリは来世の国々、即ち仏教の極楽と地獄を表わす彫刻の群像を見た。これらの彫刻は非常に美しいもので、寺院の僧トウシュエが語ったところでは、この種のものがあるのは全中国でもただこだけであった。ヴ

オルピチェルリはこの僧に伴なわれて長い間寺々の客としてとどまった。彼はまたニンポウ（寧波）の寺々を見て驚嘆し、ニンポウの東海にあるプウトウ（普陀）には一週間も滞在した。ここにも豪華な華麗な寺々があった。寧波村の天童山、天童寺は、日本の名僧である栄西や道元が参禅したところであり、普陀山と隣接する舟山島は唐、宏以後日本の船舶の寄港地であった。ヴォルピチェルリは寧波や普陀山を見るに及んで、中国と日本との間に極めて古い宗教的な関係があったことを確認し、仏教の来世観に関する研究を更に日本に於いても続けることを決心した。

一九二〇年の二月、彼は上海を立て長崎に向った。（然しそれは彼がこの時から長崎に居を定めたということにはならない。彼が長崎に定住したのは一九三三年頃からである。）彼は日本の寺院や博物館を見るために長崎から宮島、大阪、京都へ行った。彼は京都でドウケンという日本の僧によって九三四年に書かれたという報告書のあることを知った。それはドウケン自身によってなされた地獄と極楽への旅についての記述である。これはダンテが「神曲」の中で描いた地獄、煉獄、天国の遍歴を思い出させるものであった。更にヴォルピチェルリは、ドウケンの報告書に基づいて描かれたと思われる藤原信実の地獄極楽の絵巻物を見た。ヴォルピチェルリはこの藤原信実という日本の画家の死んだ年、即ち一二六五年という年

エウジエーニオ・ザノーニ・ヴォルピチェルリ

が丁度ダンテの生まれた年に相当していることに特別の注意を向けたいように思われる。

ヴォルピチェルリは仏教の来世観をめぐっての彼の探究の旅の詳細な報告を当時ニューヨークで出されていた「イル・カロッチョ」(Il Carroccio) というイタリア語の雑誌に発表した。

以上述べたところはヴォルピチェルリの生涯とその業績の概要であるが、彼に於いて見られる飽くことを知らない探究の精神と、冒險的ともいえる行動への意欲とはイタリア的天才の最も良き面を代表するものといえることができるであろう。

(一九六五年十一月十四日)